

平成 17 年度 第 1 回 ユニバーサルデザインによる冬期歩行者転倒事故防止委員会
～ つるつる路面転倒防止委員会 ～

議事概要

日時：平成 17 年 7 月 19 日（火）15 時 00 分～17 時 30 分

場所：ホテル札幌ガーデンパレス 2 階 白鳥

議事次第

- 1．開会
- 2．主催者代表挨拶
- 3．委員会について
 - (1) 委員長挨拶
 - (2) 委員挨拶
- 4．議事
 - (1) 平成 16 年度冬期歩行者転倒事故調査報告
 - (2) 平成 16 年度の活動報告
 - (3) 平成 17 年度の活動方針と全体スケジュール
 - (4) 平成 17 年度の具体的な活動内容
- 5．閉会挨拶
- 6．閉会

議事概要

啓発活動全般について

海外来訪者、道外来訪者、道内来訪者、札幌在住者、及び事故多発エリアである「すすきの地区」をターゲットとし、それぞれ区別した取り組みが必要である。

福祉や保健の現場で転倒教室などが開かれているので、その中でも雪道での転倒事故防止の啓発を進めていけば良い。

すすきの地区など、転倒事故による救急搬送が多発している場所については、戦略的な啓発活動を進めていくことも必要である。

人出の多いイベント時などは転倒事故も多発する可能性があるので、ボランティアを募って集中的に砂をまくことで転倒事故を防ぐことができるのでは。

冬期は横断歩道の青信号時間を長く調整することによって、歩行者に余裕を持たせることも転倒事故防止対策になるのではないかと。

砂箱を利用する歩行者が少ない理由として、誰でも砂箱を使っても良いことがわからないためであることが考えられる。砂箱の増設だけでなく、歩行者自身が外出時に砂を持ち歩き、必要に応じて散布することを勧めてもよいのではないかと。

防滑靴について

北海道の冬期には、「夏」(屋内)と「冬」(屋外)が混在している。屋外では靴底の金具が凍結路面では有効だが、屋内では不要。屋外でも、雪の状態(雪解けの場合、積雪、圧雪など)によって、有効な靴底が異なる。

金属のピンがついた靴底は凍結路面では有効だが、室内では滑って危ない。また、防滑靴の底によっては、新雪の時に雪が詰まって役に立たないこともある。このように、どのような場面でもどのような防滑靴を履くべきかといった情報を伝える必要がある。

一つの防滑靴で全ての路面に対応することはできないので、防滑靴を過信してはいけないことを伝える必要がある。

情報提供媒体

例えば、デジタル媒体では高齢者に情報が伝わりにくい。ホームページやパンフレット、ビデオをどのような方法で必要な利用者に提供していくか(見てもらうか)を十分に吟味する必要がある。

観光客に対しては、来訪時に目にするもの(媒体)を活用したらどうか(例:空港口ビーでのビデオ放映、JR/飛行機の機内誌に掲載するなど)。

ホームページを多数の人に見ていただく工夫としては、「ようこそさっぽろ」「Web シティさっぽろ」など、アクセス件数の高い観光案内ホームページとリンクさせることが有効である。

市民への啓発を促す情報提供の媒体として、コミュニティFM放送局との連携も考えられる。

観光客に対する啓発活動

海外から北海道への観光客数は、1位が台湾、2位が香港となっている。台湾、香港からの観光客は冬期に多く訪れるが、観光客は北海道の冬を「非日常」として魅力に感じている。彼らには、そもそも雪道が滑るという発想がない。こうした海外観光客には冬や雪そのものを紹介をしていく中で、転倒事故に関する情報を伝えていく必要がある。

観光客には、北海道に来る前に転倒防止のための事前準備をしてもらうことが重要で、そのためには雪みちや転倒防止に関する情報をできるだけ北海道に来る前に提供する必要がある。

外国人観光客への情報提供には告知チャンネルが重要で、例えばパンフレットを配布するのであれば、パンフレット自体に魅力を持たせる必要がある。

パンフレットの内容を工夫することで、外国人のエージェントの協力を得て、外国人観光客に出発前にパンフレットを配ってもらうことも可能ではないか。

観光の添乗員にも冬期路面の危険を知っていただき、観光客に伝えてもらうことも重要。

啓発パンフレットについて

救急搬送者数が多い繁華街(すすきの地区など)では、飲食店にも転倒事故の実態やパンフレットの趣旨を知ってもらい、実際に配布してもらうと良い。

パンフレットは、観光客が北海道に来ることがわかった時点で来道前に配布できると良い。

海外観光客は漫画自体に慣れていない人も多いので、漫画で構成されたパンフレットはあまり受け入れられない(読んでもらえない)可能性がある。

雪に触れたことのない外国人観光客は、雪に違いがあることがわからないと考えられ、雪には

こういったものがあるか等の紹介があると良い。(例：ざくざく雪、パウダースノー、他)
転倒防止のノウハウ集ではなく、雪の文化の紹介も含めた内容も検討してみてはどうか。

啓発活動の効果計測について

活動の効果をどのように測っていくかについて、その計測方法を十分検討する必要がある。
何かアウトカム指標を持てればよい。

啓発活動の前後に、知ってもらいたい情報がどの位伝わったかを指標の1つにすることも考えられる。

啓発活動の成果は、転倒事故の減少数(減少率)だけでなく、認知度や行動変化(砂まきを行った人数)などで判断する方法が考えられる。

砂箱の利用率は指標として使えないか？

その他

路上転倒事故は冬だけでなく夏も発生していると考えられることから、冬の転倒事故の特徴や実態を把握するためにも夏と冬の事故件数を比較することも必要と考えられる。

本州で問題視されている「つまずき転倒」では、つま先が地面にぶつかることによって転倒する。これに対し、北海道の冬期路面による「スリップ転倒」では、かかとで滑ることによって転倒する。このため、かかとの調整力が必要であると考えられる。こうした「スリップ転倒」を完全に予防することは不可能であるが、どんなに動きが緩慢になった方でも、手の動きは素早いことが多く、ノルディックウォークのようにストックを1本持って歩くようにすると、転倒防止に役立つ。

副題となっている「ツルツル路面転倒事故防止委員会」の方が委員会の内容をわかりやすく表していることから、委員会の名称は現在の副題を主題に変更する。なお、副題となった「ユニバーサルデザインによる・・・」を「ユニバーサルな利用者のための・・・」等の表現に変更することも検討すべきとの意見もあった。